

# 短期海外語学研修はどれほどの効果があるのか

—常磐大学の場合—

## How Effective is a Short-Term Study Abroad

Program ?:

A Case of Tokiwa University

いわき明星大学 大津 理香  
常磐大学 佐竹 正夫  
OTSU Rika  
(Iwaki Meisei University)  
SATAKE Masao  
(Tokiwa University)

キーワード：海外研修プログラム、短期語学留学、語学力向上、情意面での効果、常磐大学、海外留学

### 1. はじめに

文部科学省の調査によれば、日本人の海外留学者数は2004年度がピーク（82,945人）でそれ以降2011年度（57,501人）まで毎年減少している<sup>1</sup>。他方、日本学生支援機構（以下JASSOとする）の「協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」では、この期間1カ年を除き、国内の大学等から協定等に基づいて海外の大学等へ留学した学生は増え続けている。2009年度からは協定等に基づかずに留学した学生数も調査されているが、その数も加えると、2014年度は81,219人と2009年度の36,302人から2倍以上増加している<sup>2</sup>。

JASSOの調査でもう一つ特徴的なことは、留学期間が1ヵ月未満の割合が増えていることである。2009年度は約46%であったが、2014年度は約60%に達している。1ヵ月未満の留学生の多くは、大

<sup>1</sup> 文部科学省ホームページ「日本人の海外留学者数」及び「外国人留学生在籍状況調査」等について（平成28年3月31日）別添1「日本人の海外留学状況」。この調査は、OECDやユネスコなどの資料に基づいている。ここで、日本人の海外留学者には「原則として交換留学などの短期留学は含まない」とされる。[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm)

<sup>2</sup> 日本学生支援機構ホームページ「留学生支援 留学生に関する調査」  
[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html)

学等で実施されている語学習得や異文化交流を目的とする短期海外研修プログラムへの参加者であろう。

水戸市にある常磐大学でも1998年度から米国への海外研修プログラムが始まり<sup>3</sup>、現在では五つの海外研修プログラムが用意されている。米国、台湾、英国、タイ、フィリピンである。期間はいずれも2週間～4週間で、ホームステイや協定校が提供する宿泊施設に滞在しながら、現地の言語を学ぶとともに協定校の学生と交流したり、行事に参加したり公共施設を訪問するなどの異文化体験を行う。この中で米国の研修は、カルフォルニア大学アーバイン校（以下UCIとする）の付属英語学校で実施される「4週間の英会話と文化プログラム」に参加し、英語を学びながら米国の文化に触れるプログラムである。

多くの大学で短期の海外研修プログラムが用意され、しかもその数が増えているのは、グローバル化の時代に対応する教育の一環と大学が考えているからであろう。また、学生（保護者）の側にも語学力向上や異文化体験などへの期待があるのだろう。しかし、1ヵ月に満たない短期の海外研修でどれほどの効果が望めるのだろうか。

12名の学生が参加した2014年度の常磐大学の米国研修に、著者の一人である大津が引率者として参加し、このプログラムが学生の語学力や情意面などにどのような影響を与えたかを、研修前後のUCIのテストやアンケート調査、また4週間学生と生活を共にして得た観察に基づいて報告した<sup>4</sup>。

常磐大学では、2015年度にもUCIへの研修は行われ、9名の学生が参加した。著者らは2014年度と同じアンケート調査を実施し、参加学生がUCIで受けたテストの結果を入手した。そこで、本稿では、この2年間の総参加者21名のデータに基づいて、常磐大学の海外研修の効果を、特に語学面での効果を中心にして、改めて報告するものである。その前に、日本の大学等で実施された1ヵ月未満の海外語学研修を事例とする最近の研究が、それぞれの研修の効果についてどのような報告をしているのかを見てみよう。

## 2. 最近の事例研究

ここでは、日本の大学等の短期海外研修を対象にした2000年前後から2010年頃までの事例研究を取りあげる。これらの研究では、研修によって語学力がどれほど伸びたかという調査に加えて、ホームステイなどの生活体験によって、異文化理解や情意面でどのような変化が見られたのかといった調査が行われている。語学面では、研修後、参加者に語学力向上の程度や語学学習への意欲を尋ねる主観的評価型のものと研修前後に実施するテストの得点差や研修参加者と非参加者の得点差を比較する

<sup>3</sup> 常磐短期大学では、1978年度からイギリスでの海外研修が始まっている。

<sup>4</sup> 大津・佐竹（2016）。

客観的評価型がある。異文化理解や情意面での効果をみる調査では、アンケートやインタビュー、また参加者の日記等の記録が用いられる。

## 2.1 語学面での効果

主観的評価型の事例研究では、ほとんどの研修参加者が語学力全般について研修前よりも伸びたと報告している<sup>5</sup>。中でもリスニング力が伸びたとする報告が多い<sup>6</sup>。このような参加者自身の主観的評価は、テストに基づく客観的な評価と一致するのであろうか。

著者が参照した客観評価型の研究10件のうち、研修前後のテストの得点差を見るものが6件、参加グループと非参加グループの成績を比較するものが4件ある<sup>7</sup>。ここでは前者の研究を取り上げ、短期海外研修によって、参加者の語学力がどれほど伸びたのかをしてみる。表1には、それらの研究6件について、研修期間、参加者数、テストの種類と共に語学力の伸びを研修前後の平均点の得点差から計算した伸び率（小数点第二位で四捨五入）で示している。語学力は、総合力とともにそれを構成するリスニング、リーディング、ライティング、スピーキングなどの個別能力も測定されるが、ここでは総合力とリスニング力を取り上げ、その他の個別能力については「リスニング以外」にまとめて記述している。統計的に有意差がみられたものは赤い太字で記している。

表1の中で、野中（2005）だけが研修前後の総合点とリスニングの平均点の差が5%水準で統計的に有意ではないと報告されているが、他の研究では、リスニング力のみを測定した田浦他（2009）を除いて、いずれも総合点とリスニングが共に有意差ありと報告されている<sup>8</sup>。

表1では、有意差のある事例について、総合点の伸び率は6.4%から11.7%の範囲にある。また、リスニングの伸び率は、8.5%から15.2%（ただし具体的情報に関して）の範囲にあり、総合点のそれよりも全体的に高い。併せて、リスニング以外の語彙・文法やリーディング等は有意差がないとする報告が多く<sup>9</sup>、この結果は参加者の主観的評価に基づく報告とほぼ一致する。また、この中で3件の研究が参加者を研修前の得点によってグループ分けし、下位群に有意な伸びが確認されたことを報

<sup>5</sup> 文野・杉本(2000)、小林(2004)、古屋(2005)、松田(2007)。

<sup>6</sup> 小林(2004)、古屋(2005)、松田(2007)。

<sup>7</sup> 前者の6件は表1に記載されている。後者の4件は、木村(2006)、Sabet(2007)、大塚(2009)、久野(2011)である。

<sup>8</sup> 吉田・小寺(2009)には統計的な検定の報告がないので、論文の表(pp.115~117)を用いて、著者らがt検定を行い、総合点とリスニング(具体的情報)について有意差を確認した。

<sup>9</sup> 小林(1999)は、他と異なって、語彙・文法の伸び率の方がリスニングのそれよりも高い。

告している<sup>10</sup>。

表 1: 客観的評価（研修前後の得点差）に基づく主な研究

研究報告(年号)	研修期間(週)	研修参加者(人)	テストの種類	総合点伸び率(%)	リスニング伸び率(%)	リスニング以外伸び率(%)
小林(1999)	3~4	31	ITP TOEFL	6.4	8.5	10.8
野中(2005)	3	51	TOEFL	0.1	2.3	-1.23
野中(2008)	3	29	TOEIC IP	7.8	12.7	0.5
田浦他(2009)	3	20	TOEFL	NA	11.0	リスニングのみ測定
吉田・小寺(2009)	2	15	CASEC	11.7	具体的情報 (15.2) 大意把握 (13.1)	9.3
木村(2011)	3	14	英検	9.9	11.2	2.34 (語彙・文法・ ライティングのうち ライティングのみ有意 差あり)

## 2.2 異文化理解や情意面での効果

語学力以外の異文化理解や情意面については、積極的な効果を示す報告が多い。例えば、英語や外国人とのコミュニケーションに不安を感じていた参加者が積極的に英語を使うようになった<sup>11</sup>。また、研修が参加者個人にとって様々な形で意味を持って、自己成長や異文化理解を促進した、などの報告がある<sup>12</sup>。次の文章が情意面での効果を簡潔に伝えている。「海外研修での3週間余りは、学生たちにとっては新しい環境における不安に満ちた挑戦であったかもしれない。しかし、彼らはそこにおいて、幾多の人々と出会い、彼らと触れ合うことを通じて、多くを経験し、多くを学び、人間としても大きく成長したといえる。」(安藤、2005、p. 34)

## 3. 常磐大学の事例

### 3.1 短期海外研修A(米国)

この研修では、出発前に7回(1回90分)の事前研修があり、帰国後は1回の事後研修が行われる。UCIに到着すると学生は最初にテストを受けて語学習熟度別クラス(B1クラス=初級、B2クラス=初級+、Cクラス=中級-、Dクラス=中級、Eクラス=中級+)に分かれる。このテストは最終日にもう一度行われた。授業は週5日行われ、学生は毎日2コマ約3時間の授業を受ける。1コマはリーデ

<sup>10</sup> 野中(2005)と野中(2008)は下位群に、総合点とリーディングに有意差を確認している。また、久野(2011)は、吉田・小寺(2009)のデータについてt検定を行い、成績下位群に総合点とリスニングに有意差を認めている。(p. 130)

<sup>11</sup> 小林(1999)、小林(2004)、安藤(2005)、田浦他(2009)、大塚(2009)、黒崎(2013)。

<sup>12</sup> 古屋(2005)、松田(2007)、黒崎(2013)。

ィングやライティング中心の授業で、もう1コマはリスニングやスピーキング中心の授業である。他には週のうち2日の3時間ほど、「カンバセーションパートナー」（以下CPとする）というUCIの学部生1人と4、5人のグループを作って英会話をしたり自由に活動をしたりする時間が与えられる。

CP活動のない日の午後は、引率者の出した課題のために、グループに分かれて現地の学生にインタビューをしたりするほか近隣の州立大学の日本語クラスに入って英語で日本文化について発表したり、現地の日本語学校へ出かけてバイリンガルの子もたちと交流をしたりした学生もいた。2015年度の研修ではUCIで日本語を学んでいる学生と常磐大学の学生がペアになって、相互に日本語と英語の会話を行う機会を持った。週末は、ほとんどの学生がホームステイ先の家にこもらず、UCIの学部生がリードしてくれるディズニーランドなどの娯楽施設へ行くツアーへ参加していた。ホームステイは、一人で一つの家庭に入ることも、二人一組で一つの家庭に入ることも可能で、これは事前に学生が自分の英語力や不安などを考慮して選択できることになっている。

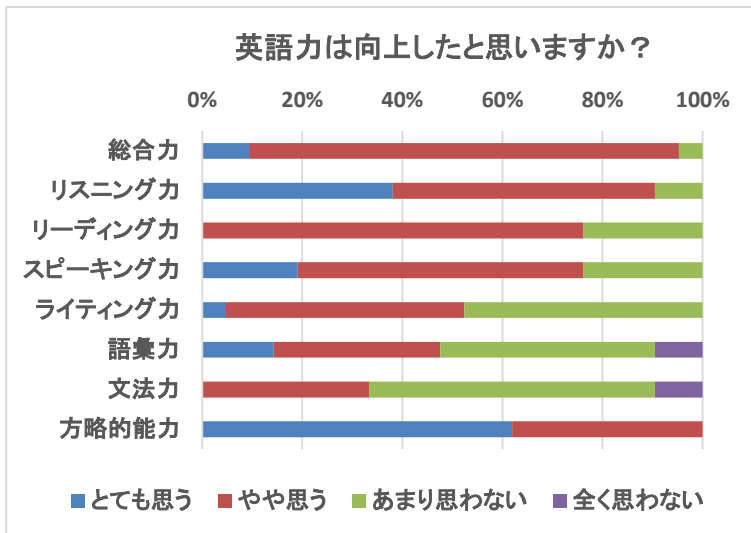
### 3.2 語学面での効果

語学力向上の主観的評価を分析するために、著者らは研修後アンケート調査を行った。客観的評価には、UCIが実施した研修前と後の2度の同じテストの結果を用いた。これは紙ベースのMichigan English Language Institute (ELI) Testingで、リスニングが20問（応答問題）、GVR(文法・語彙・読解)が80問の計100問（100点満点）のテストである。情意面への効果は、研修後のアンケート調査やインタビュー、そして引率者による感想に基づいている。

図1は「英語力は向上したと思いますか」に対する2年分の回答の集計である。この図から以下の点が観察される。第一に、ほとんど全員が総合的な力の伸びを感じている。第二に、4割の学生がリスニング力の顕著な改善を指摘している。第三に、8割近くの学生がスピーキング力やリーディング力も向上したと思っている。第四に、ライティング力と語彙力はほぼ半数の学生が改善したと感じているが、文法力が改善したと思っている学生は半数以下である。最後に、何とか英語でコミュニケーションをとるための方略的能力については、全員が肯定的である。

これらの結果は、最近の事例と同じ傾向を示している。これは、英語の環境に身を置くことや授業がコミュニカティブに展開されたことなどで、英語のインプット量が普段の何倍にもなったことが要因ではないだろうか。語彙や文法に関しては、これまで日本で学習法として馴染んできた方法、つまりテキストをじっくり和訳したり、語彙・文法・読解問題を解いたりする機会が減ったのが原因ではないかと考えられる。実際、学生とのインタビューの中で、「アメリカにいた時は学習のバランスはリスニングやスピーキングに傾いていた」という意見があった。

図1 語学力向上の主観的評価



次に、語学面での客観的評価を見てみよう。表2は、2年分のELI testingの結果である。クラス別と全体の事前、事後のリスニング(L)、文法・語彙・読解(GVR)及び総合点の平均値と標準偏差(SD)が示されている。一番下の欄は参加者全体の各項目別の平均値の伸び率(%)である。研修前後の得点の伸びで有意差が確認されたのは、参加者全体の総合点とGVR(文法、語彙、読解)、成績下位クラス(B1)の総合点とGVR及び成績中位クラス(B2&C)の総合点である。それらは表1と同様、赤い太字で示している。

この表から、次のような事実が観察される。第一に、総合点の伸び率は13.7%と表1のどの事例よりも高い。第二に、総合点の伸びは主にGVRの伸びによるもので、リスニングについては有意な向上を確認できず、リスニング力が伸びたと感じている学生の主観的な評価を裏付けることはできなかった。また、これはリスニング力に有意差を確認した先の事例とも異なっている。第三に、成績下位の学生の伸びが上位の学生のそれを上回っている。有意差が確認されたB1クラスの総合点の伸び率28.0%は同じように有意差が確認されたB2&Cクラスの12.7%の2倍以上である。成績の下位群の伸びが大きいことは、すでに前節の研究の一部が指摘しており、常磐大学の事例もそれに加わることになる。

表2: UCIでのELI Testingの結果(2014年度と2015年度)

クラス	B1 (n=9)			B2 & C (n=8)			D & E (n=4)			全体 (n=21)		
	L	GVR	総合点	L	GVR	総合点	L	GVR	総合点	L	GVR	総合点
事前テスト	6.11 (1.05)	23.44 (5.53)	29.56 (5.70)	8.00 (1.93)	35.38 (4.31)	43.38 (3.78)	11.25 (1.89)	50.50 (7.19)	61.75 (9.00)	7.81 (2.44)	33.14 (11.45)	40.95 (13.32)
事後テスト	7.56 (3.50)	30.33 (5.24)	37.89 (7.22)	9.00 (2.56)	39.88 (5.51)	48.88 (6.81)	10.75 (3.40)	50.75 (10.44)	61.50 (13.72)	8.71 (3.23)	37.86 (9.92)	46.57 (12.06)
平均伸び率(%)	24.6	<b>29.5</b>	<b>28.0</b>	4.7	10.4	<b>12.7</b>	-4.4	0.6	-0.5	11.5	<b>14.5</b>	<b>13.7</b>

表の数値は平均値、( )はSD

### 3.3 異文化理解や情意面での効果

異文化理解については、米国の文化や生活への理解や興味、ホームステイ体験などに関する質問を用意した。これらに対して、ほぼ全員が前向きな回答をし、再び米国で生活してみたいと答えている。今まで練習してきた英語がネイティブスピーカーに通じた喜びを経験したことや、今後の就職に活かしたいという願望が生まれたこと、そして今回は上手く話せなかったけれどもっと練習して上手く話せるようになってホストファミリーの元にもう一度戻って来たいという目標ができたこと等が理由として挙げられていた。これらは米国での異文化体験が充実していたことを窺わせる。

情意面や人間的成長への影響については、研修が今後の語学学習や生活にどのように役立つか、研修を通じて自分はどう変わったか、などについて記述式で回答してもらった。紙幅の関係で、学生の声を詳細に紹介することはできないが<sup>13</sup>、彼/彼女らが「チャレンジする勇氣」「自立」「自信と積極性」「人間関係の大切さ」を得ていることが分かる。これは引率教員である筆者も1ヵ月間一人一人と毎日接している中で少しずつの変化を確認することができた。最終日には、研修初日の不安気な表情は一変し、研修中にできた友人や一緒に生活をしたホストファミリーとの別れを惜しむほどにやわらかいものになっていた。



プログラム修了式後 UCI キャンパスにて

### 4. おわりに

本稿では、1ヵ月未満の短期海外研修はどれほどの効果があるか、特に語学力の向上について、最近の事例研究を紹介し常磐大学の事例を検討した。幅があるにせよ、有意差があった事例では、常磐大学も含めて、総合点でおおよそ10%くらい伸びることが分かった。常磐大学の伸び率が他よりも高

<sup>13</sup> 詳細は、大津・佐竹（2016）pp. 135-136 を参照されたい。

いのは、研修期間が4週間と他の事例よりも1~2週間長いことが関係しているかもしれない。個別の能力では、常磐大学の場合には有意差はなかったが、多くの事例はリスニング力の伸びが大きいことを報告している。また、成績下位のグループほど伸び方が大きくなる傾向は常磐大学の場合でも示された。

異文化理解や情意面については、語学力のようにその効果を定量的に示すことは難しい。しかし、短期間とはいえ、異文化に直接ふれ、その社会で暮らすことは、参加者に量ることのできない何かを残すであろう。常磐大学の研修に参加した学生の一人は次のように述べている。

「英語が苦手だからこそ参加しようと思った海外研修。最初は不安でしたがそんなことも忘れてしまうくらい楽しくて、参加して本当に良かったと思える1ヵ月間でした。見える風景も文化も人も、身の回りで起こることすべてが新鮮でとても濃い時間を過ごすことができました。1ヵ月間で英語のスキルが伸びた自信はありませんが、様々な経験が自分を成長させたと自信を持って言えます。今回の海外研修をきっかけに英語を勉強する時間を増やしたいと思うようになりました。また、いろいろな人に支えてもらった1ヵ月間で感謝の気持ちでいっぱいです。」(常磐大学海外研修A参加者作成のStudy Abroad Report2015, p. 15より抜粋)

**謝辞** 次の方々のご協力に御礼を申し上げます。常磐大学の2014年度と2015年度の海外研修Aに参加した学生の皆さん、常磐大学国際語学交流センターおよびUCI Extensionのスタッフの方々、2015年度研修の引率者であった常磐大学の丸山悦子先生、統計手法について助言を頂きたいわき明星大学の佐藤拓先生。

#### 引用文献

- 安藤喜代美 (2005) 「国際感覚を持つ実践的教養人育成のための名城大学海外研修プログラム (1) : 達成感による学習意欲の向上」『日本科学教育学会研究会研究報告』19(5), 29-34.
- 大津理香・佐竹正夫 (2016) 「短期海外語学研修の効果—先行研究と常磐大学の事例」『常磐国際紀要』20, 123-146.
- 大塚賢一 (2009) 「茨城工業高等専門学校における海外短期語学研修の言語学的教育効果検証—2年間のデータ分析から—」『茨城工業高等専門学校研究彙報』44, 23-30.
- 木村啓子 (2006) 「英語圏滞在が学生の英語力に及ぼす影響—短期語学研修により英語力は向上するか—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』12, 1-20.
- 木村啓子 (2011) 「大学生の海外短期研修の効果への一考察—リスニングとライティングに焦点を当てて」『尚美学園大学総合政策研究紀要』21, 17-30.



- 久野寛之 (2011) 「3週間の短期海外語学研修が大学生の英語能力に及ぼす効果について」『北海道文教大学論集』12, 127-145.
- 黒崎真由美 (2013) 「海外留学の意義と効果—短期海外研修&三カ月留学—」ウェブマガジン『留学交流』29, 1-7.
- 小林健 (2004) “A Study on the Functions of Study-Abroad Programs as an Effective Means of English Education in Japan,” 『明海大学外国語学部論集』16, 11-36.
- 小林敏彦 (1999) 「海外短期語学研修で英語力はどのくらい伸びるものか」『小樽商科大学人文研究』97, 83-100.
- 田浦秀幸・堀井耕太郎・馬西卓徳・岡田宏子・清水大介・柏本恵未・戸成辰也 (2009) 「ニュージーランド短期英語研修の効果に関する一考察」『言語文化学研究 (言語情報編)』4, 1-22.
- 野中辰也 (2005) 「海外語学研修の効果測定」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』35, 7-12.
- 野中辰也 (2008) 「海外語学研修の効果測定 (2)」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』38, 43-49.
- 古屋則子 (2005) “Evaluating a Short-Term Study Abroad Program,” 『文化女子大学紀要. 人文・社会科学研究』13, 19-30.
- 文野峯子・杉本明子 (2000) 「短大生の短期アメリカ研修の効果に関する研究—アメリカ人のステレオタイプと英語力の自己評価への影響—」『広島大学留学生教育』4号, 69-82.
- 松田康子 (2007) 「短期海外研修の意義とその事前研修について—学生の報告書とアンケート調査の結果から—」『名古屋文理大学紀要』7, 45-50.
- Sabet, Mehran (2007) “Are Study Abroad Programs Effective?” 『聖学院大学論叢』20(2), 177-184.
- 吉田三郎・小寺光雄 (2009) 「短期海外語学研修が高専学生の英語力にもたらす効果」『福井工業高等専門学校研究紀要. 人文・社会科学』43, 111-122.